

# 継承日本語教育実践報告

## 獲得型授業での形成的評価活動

### —ニュース番組制作プロジェクト学習での取り組み—

根元佐和子（パリ南日本語補習校）  
nemotosawako@gmail.com

#### 【要約】

本実践報告は、在外の年少者継承語教育の現場における評価活動の実践報告である。評価の目的は学習者の学びを支援することである。評価は、単に学習のレベルを測定するだけの活動にならないようにするべきであり、学習継続をするための動機を維持し、さらに高めるものでなくてはならない。本報告では、継承日本語教育の基本である家庭との連携を図りながら、活動的な形成的評価に焦点を当て、活動の成果を検証した。

#### 1. はじめに

この実践の教室は、継承日本語学習者4名の子どもたちを対象としたZoomでのグループ日本語教室である。実践者はこのグループに、「さまざまなアクティビティ（学習技法）を介して、学習者が能動的に学びに取り組んで（渡部，2020，pp.1）」いかれるよう授業プランを立てた。本実践は、一連のアクティビティを駆使したアクティブ・ラーニングでのプロジェクト活動である。スピーチやドラマワーク<sup>1</sup>を取り入れての作品制作を行い、アクティブ・ラーニングのスタイルに合わせて、形成的評価としてパフォーマンス評価<sup>2</sup>を導入した。本実践は、評価活動を授業全体に一体化させ、ダイナミックな授業を形成できるように試み、継承日本語学習における評価方法を検討しようとするものである。本実践はもう一人の教師吉開麻衣子とチーム・ティーチングを行った。

#### 1. 1 本継承日本語教室の指導指針

このグループの子どもたちはフランス在住の日仏家庭の国際児で、二つの言語を母語としてい

---

<sup>1</sup> 「自分でない何かに「なって」学ぶ活動」（渡部,2020,pp.121）

<sup>2</sup> パフォーマンス評価とは「知識やスキルを使いこなす（活用・応用・総合する）ことを求めるような評価方法の総称」で、「評価が教育的であるためには、①真正の課題を用いることと②生徒や教師が、（同様の）課題でパフォーマンスを修正するために、すぐに使えるようなフィードバックや、それにもとづいて修正する機会を提供することの2つが必要」（奥村他，2017，pp.119-120）な活動型評価方法である。

る。彼らは生活の言語と現地語を含めて、複数の言語・文化環境の中で生活する学習者たちである。そこで、教育指導を次の指針に基づいて行っている。

- (1) 複言語・複文化<sup>3</sup>の理念で継承日本語教育の視点に立った言語教育支援
- (2) 家庭・現地校・現地生活からの生きた情報の活用
- (3) 教室内の学習を教室の外につなげ、社会とコミュニケーションがとれる活動

## 1. 2 本評価活動実践の背景

文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会資料教育課程企画特別部会「3 学習評価の在り方」では、学習評価について「子供たちの学習状況を評価するものである。子供たちにどういった力が身に付いたか、という学習の成果を的確に捉え、教員が指導の改善を図るとともに、子供たち自身が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにするため」としている。さらに、「教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性を持った形で改善を進めること」「個々の授業のねらいをどこまでどのように達成したかだけでなく、子供たち一人一人が、前の学びからどのように成長しているか、より深い学びに向かっているかどうかを捉えていく」「カリキュラム・マネジメント」の中で、学習・指導方法や教育課程の評価と結び付け、子供たちの学びに関わる学習評価の改善(略)、授業改善及び組織運営の改善に向けた学校教育全体のサイクルに位置付けていくことが必要」と記述している。

教育心理学者ベンジャマン・サミュエル・ブルームは、教育活動における評価を大きく、診断的評価・形成的評価・総括的評価の3つに分類している。近藤ブラウン(2019, pp.190-191)は、診断的評価を「日本語学習を始めるにあたり、どの程度の準備ができているのかを診断するために行い」、形成的評価を「学習の進捗状況を把握し、学習者にフィードバックを与えることを主な目的」とし、総括的評価を「学習成果や言語能力などについて、何らかの判断を行うことを目的」とする、とまとめている。

在外継承日本語教育の問題点の一つに、授業時間が大変短く、限られた時間で漢字、テキスト読解、文化的な内容の学習など、多岐にわたる内容を学習しなければならないということがある。授業時間数は多くの教育機関で1週間に一度の授業、一回授業時間は60分から90分が主である。たった週一回の授業に、評価活動を効果的に組み込まなければならないという現実問題があり、継承日本語学習者のための評価に関しては、世界各地で関心が高まっているとはいえ、まだまだ未開拓の分野である、と近藤ブラウン(2019, pp.201)が指摘している。それゆえ、効果的な評価活動の検証が必要であると考えた。

## 1. 3 本評価活動実践の目的

筆者はプロジェクト学習の過程において、いくつかの形成的評価活動を行なった。本稿では二つの形成的評価活動について記述する。本評価の目的は、まず、評価によって洗い出した改善点を次の学習に役立てることである。さらに、学習内容の成立状態を学習者自身で確認し内省を促

---

<sup>3</sup> 複言語主義とは個人の持つ複数の言語能力が相互補完的な関係に存在する。複文化主義とは、自分の中にも他人の中にも様々な異なる文化が存在し各々を認め合え、その考え方の下に国別・地域別にバラバラに考えることはしない(奥村他, 2016)とする理念。

し学習の進展を図り、動機付けを維持・アップさせることを狙っている。そこで筆者は以下の 4 点を考慮した評価は、どのようにできるだろうかと検証を試みた。

- (1) 家庭を巻き込んだ評価
- (2) 自己評価、他者評価を導入
- (3) 教室の外とつながりながら活動的な評価
- (4) 学習者が楽しみながら行える評価

## 2. 先行実践研究

パフォーマンス評価について春日井は(2013)、「ある特定の文脈のもとで、様々な知識や技能などを用いて行われる人の振る舞いや作品を、直接的に評価する方法で、実際に何かをやらせてみて、直接的に学力を評価しようとするものである。パフォーマンス評価では、パフォーマンス課題(論説文やレポート、展示物といった完成作品、スピーチ、プレゼンテーションなど)を与えて解決・遂行させて評価するという手順によって行われる」と説明している。

継承日本語学習者を対象にした事例は探し出せなかったが、パフォーマンス評価について、日本での中学社会科(百田他, 2020)、高校社会と情報科(春日井, 2013)、アメリカでの大学生日本語学習者を対象(Akiyama, 2013)にした研究が報告されている。これらの報告から、学習者は課題に対して多面的に学び、批判的に考え、学習者の自律性を高めることができると述べている。さらに、評価の妥当性・信頼性を求めるため、チェックリスト、採点表、さらには中高校生の報告にはルーブリック評価<sup>4</sup>を用いることが学習を支援する上で有効であると述べている。

## 3. 本プロジェクト活動の概要

本実践は、オンライン授業での一連のプロジェクト活動である。生教材の読解支援を軸として、リサーチ・プレゼンテーション・ディスカッション・ドラマワークといった複数のアクティビティを体系的に取り入れ、オンライン授業の特徴を最大限に生かして、録画作品のニュース番組を制作した。その後、補習校の保護者を観客とする録画作品上映会<sup>5</sup>で作品を発表した。本報告の評価活動は、このプロジェクト中に行った2回の形成的評価を記述する。

### 3. 1 対象学習者

本実践のクラスは、年齢が12歳~14歳の日仏家庭4人の学習者からなるもので、「T組」と呼んでいる。レベルの差はあるが、どの子どもも全員現地校に通い、母親が日本人で父親がフランス人の2言語バイリンガルの日仏継承日本語学習者である。クラスの構成は次の通りである。年号は生まれた年を表す。

N : 男 2006 年 14 歳      L : 男 2007 年 13 歳      C : 女 2007 年 12 歳      R : 男 2008 年 11 歳

---

<sup>4</sup> ルーブリック評価については以下を参考にした。

Rubistar <http://rubistar.4teachers.org/index.php?screen=WhatIs&module=Rubistar> (2022年12月30日)

<sup>5</sup> コロナ災禍の影響で対面式発表会が中止され、2020年5月に教師の有志がZoomクラス合同録画作品上映会を開催した。

### 3. 2 本実践の時期

この「T組」クラスの期間は2019年10月から2020年6月までで、授業は毎週月曜日、週一回60分で年間26回である。

### 3. 3 本実践の目標

本プロジェクトの目標は次の3つである。

- (1) 活動を通して教科書読解を支援し、学習者の視野を広げ、テーマに関する問題意識を広げる
- (2) 仲間との活動に何らかの貢献をする経験し、学習への参加感を高める
- (3) 社会とコミュニケーションをとる活動から、他者の存在を意識し相手の立場に立って考える姿勢を培う勢を培う

### 3. 4 使用した教材

一年間の読解教材は、主に文部科学省認定の国語教科書を使用しているが、それ以外の生教材を使用した教材を使用することもある。読解指導は指導要領に沿った教え方はしておらず、教科書読解は行いが、単元内容から派生して学習者の生活環境を考えながら問題意識を喚起し、社会問題へ繋がるように工夫を行なっている。学習全体を一連のデザインの指標として、「マルチレベルの学習活動、プログラム全体の学習目標の一貫性と継続性を維持」できるように「学習者主体の学習活動、複数の教科をテーマに応じて関連付けて教える統合型学習」(ダグラス, 2006)の視点を加味している。このグループでの読み物教材は、基本的に『国語五』を使用した。本実践の2020年3月からの読解教材には生教材を使用した。本実践では、公益財団法人アイヌ民俗文化財団ホームページウェブ資料からの映像資料である「カムイからのおくりもの」の生教材を使用した。録画資料の音声を書き起こし、読解用テキスト教材にした。漢字表記も日本人成人が読む表記と同じように漢字語彙にし、ルビをふって配布した。このビデオ「カムイからのおくりもの」は、公益財団法人アイヌ民族文化財団が提供する15分の映像である。北海道に生きるアイヌのかつての伝統的な狩猟技術と食生活の様子を、小・中学生向けに紹介するもので、映像とともに日本人のナレーター、さらに旧アイヌ民族博物館館長の説明からなるビデオ資料となっている。

### 3. 5 実践方法

本実践は川口(2016)の「文脈化」の理論と、渡部(2015)の教育理論「獲得型授業」を軸にプロジェクト全体を組み立てている。

川口は「文脈化」について「ある表現が「誰が／誰に向かって／何のために」行われるかを記述した上で指導を行うこと」としている。この理念を導入しての学習指導は、次の二つの利点が見出される。まず、活動の文脈トピックを教室活動において工夫することで、学習カリキュラムに添いつつ学習者中心の授業展開ができるということである。次に、学習者に必要な文型が抽出でき、学習活動が生日本語運用となるということである。本報告の評価活動の一つに、教室外の大人による他者評価を導入したため、プロジェクト活動を通し、教師は意識して「文脈化」を徹底させることにより、継承日本語学習者が取得しにくい敬語表現の指導を行った。これは、筆者の学習指導には、外のコミュニティとつながりながらの言葉の学習を目指しているため、外部

の他者と話すためには欠かせない指導と考えている。

渡部の「獲得型授業」は、学習者が能動的に学びに取り組んでいくアクティブ・ラーニングの教育理論である。渡部は「教師は学習者に「全身で学ぶ場」を提供し、「自律学習者」となるよう援助する。教師は、種々の「アクティビティ」を駆使して、学習者に知識だけでなく「知恵」（演劇的知）を獲得させる」として、リサーチワークを軸にプレゼンテーション・ディスカッション／ディベート・ドラマワークを関連づけた学習モデルを提起している。本実践の一連の活動では、上記の渡部の獲得型授業の考え方に基づき、学習者がリサーチで集めた情報に検討を重ね、一定のメッセージに練り上げ、それをただ口頭で説明するのではなく、創造的で工夫を凝らした表現に練り上げ、公共の場でのプレゼンテーション技術を身につけていく。さらに、公共の場でのグループプレゼンテーションを通じ、他者と共有された経験をもとに、今後の学習の内省と深化を可能にする学習連鎖の実践プランを立てた。このプランの構成要素の一部として、形成的評価活動を行った。

### 3. 6 指導計画

本実践はテキスト「カムイからのおくりもの」の読解、作文活動、リサーチ、プレゼンテーション、ディスカッション、ドラマワーク、アンケートのアクティビティから構成されている。

折からのコロナ災禍に伴い、フランス全土でロックダウンの措置が取られ、2020年3月から学校教育機関は全て閉鎖となった。その措置に伴い、筆者の教える補習校で、例年7月に開催している貸し切りホールで一堂に会しての学習発表会が中止となり、オンラインで開催する運びになったのを機に、このT組の子どもたちはこの補習校の卒業生<sup>6</sup>として特別参加した。

次に活動の流れを順番に紹介する。

- (1) ビデオ「カムイからのおくりもの（15分52秒）」の視聴
- (2) 教師による音声教材を文字化したテキストの読解「カムイからの贈り物」
- (3) リサーチ「アイヌの生活」
- (4) プレゼンテーションのリサーチ内容（下記4.3）の発表
- (5) リサーチ内容の他者評価活動「へえ〜、それは知らなかったチャンピオン」
- (6) ディスカッション：録画作品の進行決定
- (7) 録画カメラリハーサルとその内容の評価活動・内容の推敲
- (8) 本番録画
- (9) 録画上映会・アンケート実施
- (10) 子どもLの挨拶

上記の（5）と（7）に形成的評価を導入し、以下4.4と4.6で記述する。

## 4. 本プロジェクト活動の実際

### 4. 1 ビデオ「カムイからのおくりもの」の視聴

---

<sup>6</sup> この「T組」は2018-2019年度までパリ南日本語補習校のクラスであったが、教室不足のため継続が不可能となり2019年6月で卒業生となった。それ以降の授業は子どもたちと保護者からの希望でZoomグループ日本語教室を行っていた。

この映像教材の音声を書字化したものを読解する前に、ビデオの視聴をした。その理由は、複数言語環境で生活する子どもたちは、聴覚からの文章理解が、文字読解による理解より優れていること、また映像が内容理解を助けになるということも期待し、文字読解に先駆けてこのビデオの視聴を行った。さらに、宿題として、家庭の両親とともにこのビデオを見て、内容について家族と話し合うように指示した。家庭での言語は自由とした。家庭での反応は大変よく、特に日本語非母語話者の父親の興味を引き家庭での対話テーマとなった、との報告もあった。

#### 4. 2 読解活動 映像資料の文字化教材「カムイからのおくりもの」の理解

読解教材は、上記 4-1 の映像資料の語り内容についてリライトをせず、音声内容を教師が変更を加えずに漢字仮名交じり文に文字起こししたものを、教材として使用した。学習者が読むのに難しいと思われる漢字語彙にはルビをふった。

授業では、いわゆるクラシックな「国語読解授業」を行う。学習者は全ての語彙や表現を理解しているわけではないが、前述のビデオ視聴を通じ、さらに家庭で話し合うことで、内容の理解を助けながら本テキストの読解を行った。

また、授業での読解活動と並行して行なった、宿題でのリサーチ活動もテキスト理解の助けとなったのではないと思われる。次の 4.3 で記述する。

#### 4. 3 リサーチ アイヌの生活

「リサーチ「アイヌの生活」」では、まず、子どもたちにアイヌの生活に関して自由にテーマを選び、情報を各自で調べる作業、つまりリサーチすることを予告した。

リサーチ活動に先駆け「イランカラプテ」キャンペーン推進協議会 PR ムービー（2分）を視聴することを宿題として課した。このビデオは、アイヌ民族の伝統的な衣・食・住を紹介している。これは、次に予定されているリサーチテーマを考えるヒントになるように、という思惑があり、家庭で視聴させたビデオである。

テーマは子どもたちが自由に決めるようにと指示した。ある者は宿題で見たビデオの内容を参考にし、また他の者は自分の興味のあるテーマを自主的に決めていった。4 人の子どもたちのテーマはそれぞれ C「アイヌの住まい」、L「アイヌの歴史」、R「子どもの遊び」、N「アイヌ料理」となった。リサーチは宿題とし、リサーチ言語は何語でもよく、家庭で親と対話する、手元にある辞典やインターネットで調べる、ビデオを再度見る、など自由に行うことを指示した。次回の授業までに調べた内容をノートに書き、スキャンで教師にメールで送ることとした。子どもたちから提出されたリサーチ内容に関して、教師は表記の間違いの箇所を指摘し、子どもたちに直させてから再提出を指示した。この原稿が次に説明する「へ～、知らなかったチャンピオン」活動で発表する、プレゼンテーションの原稿となる。図-1 と 2 に、子どもたちのリサーチ内容を紹介する。

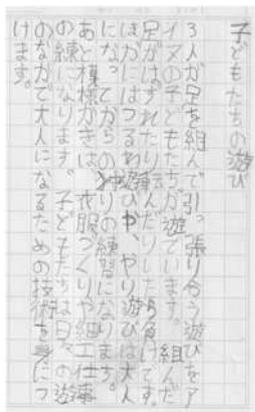


図-1 「子どもたちの遊び」 子ども R

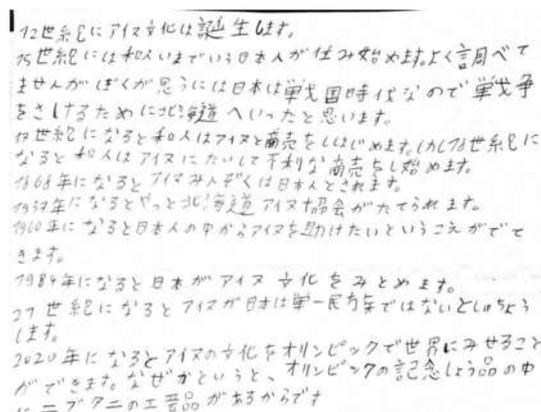


図-2 「アイヌの歴史」 子ども L

#### 4. 4 リサーチ内容の他者評価活動「へえ～、それは知らなかったチャンピオン」

次に「へえ～、それは知らなかったチャンピオン」という活動を行なった。これはリサーチ内容の興味深さの度合いについて、図3の採点表を使用して評価をするもので、二つの評価活動から構成されている。一つは教室での子どもたち同士の他者評価、もう一つは家庭で母親と父親からの他者評価で、この二つの他者評価を形成的評価として位置付ける。教室での子ども同士の他者評価では話し方の基準と内容の興味深さの基準について、家庭で保護者による他者評価では内容についての評価を行なった。

##### 4. 4. 1 教室での他者評価

次に、教室でプレゼンテーションを行なった。これは、リサーチ内容を「へえ～、それは知らなかったチャンピオン」という、子ども同士が評価し合う他者評価活動で、記述内容や話し方を改善するための形成的評価と位置づけた。準備として、原稿をスラスラ読めるようになることを目的として5回のテーマ音読の宿題を課した。テーマ音読というのは、ただ単調につまらなく読み上げるだけの音読練習ではなく、テキストの読みの方にバリエーションを与え、発表時のカメラワークを意識しての音読練習を目的として課した。音読宿題のテーマは次の通りである。

- (1) 窓の外を見て、木を見ながら気持ちよく音読を2回
- (2) 座ってコンピュータあるいはスマートフォンのカメラを見てにこやかに音読2回
- (3) お父さんの前から5メートル離れ、なるべく顔を見ながら音読1回

子どもたちは家庭での音読練習を通し、自身で内容の推敲を重ねていた。

翌週の教室での「へえ～、知らなかったチャンピオン」の活動は、ビブリオバトル<sup>7</sup>の手法に類似した、誰の発表が興味深いかを決定する評価バトルである。これは、話し方・内容・声・視線・姿勢の良さ・良い点と改善点の6項目について、お互いに評価し合った。その後、ディスカッション形式で、追加のコメントを述べあつての他者評価を行なった。この評価内容は、引き続き、のちに行うドラマワークでの録画に向け、フィードバックから内省を引き出し、話し方の改善をすることを目的とした。この子どもたち同士での内省活動を一部紹介する。他の子どもたちから

<sup>7</sup> ビブリオバトル普及委員会 (<http://www.bibliobattle.jp/aboutus>) が明示するビブリオバトル公式ルールを参考にした。

Lへのコメントでは、発表はかなり早口なので、もう少しゆっくり話したほうが良いことが指摘され、本人も納得した。内容面では、歴史的なことだけでなく2020年予定の東京オリンピックの公式グッズにアイヌの工芸品が出品されることに触れたのも良かったとし、写真で示された工芸品に興味を示していた。

#### 4. 4. 2 家庭での他者評価

その後、この「へえ～、知らなかったチャンピオン」評価を家庭での宿題とし、子どもたち全員のリサーチ内容が、興味深いものであるかを家庭の母親と父親に評価してもらった。この活動<sup>8</sup>は、リサーチ内容を教室外の他者に評価してもらうこと、両親のことばの教育への参加、母親との語彙学習・音読読解、父親への日仏語仲介活動<sup>9</sup>などを目的にした。子どもが母親に音読をする際、自分以外の子供の原稿が読めるよう、教師は全ての子ども原稿をタイプで打ち、漢字には全てルビを振っておいた。

子どもたちは、まず、日本語母語話者の親、つまりこのクラスでは、母親に全員のリサーチ内容を読み上げ、母親に内容を把握してもらった。子どもが言葉の意味が分からない時には、母親から説明してもらい、内容を理解

しながら音読することを課した。そして、母親に誰の内容が一番面白かったかを評価してもらった。この時、子どもたちは自分以外のリサーチ原稿を読まなければならない、さらに、母親との対話から語彙学習を行うというわけである。この母親とのやりとりは、次に行う父親へのフラン

お友達の記事を読んで、びっくり度(1~3)をつけてください。  
1 おへえ 2 へえ 3 えっ、ホントに!

		発表者 ほっぴょうしゃ			
審査員 しんさ員		子ども1	子ども2	子ども3	子ども4
子供同士の 他者評価	子ども1	—			
	子ども2		—		
	子ども3			—	
	子ども4				—
親からの 他者評価	子ども1文				
	子ども1文				
	子ども2文				
	子ども2文				

図-3 「へえ～、知らなかったチャンピオン」シート

<sup>8</sup> マルチリンガル児の異なる言語間の自然な言語使用についての理論をトランス・ランゲージングと言うが、加納(2016)は「トランス・ランゲージングをマルチリンガルの自然な言語仕様に根ざし、「状況・場面に即して、マルチリンガルが自らの全言語レパートリーのなかから最適な要素を選び、言語の境界線を超えてそれらを組み合わせてタスクを遂行(García, 2009)」し、学習者が、トランス・ランゲージングを通して、新たな知を獲得して概念の構築を進めつつ、課題を完成させていくプロセスを検討」している。

<sup>9</sup> CEFR 増補版(2018)の「médiation(媒介(仲介))」では次のように記述されている。筆者が仏語から日語へ翻訳した。仲介において、言語使用者/学習者は、同じ言語、あるいはある言語から別の言語へと意味を構築・伝達するための橋渡しやツールを作る社会的行為者としての役割を果たす(中間言語・仲介)。コミュニケーションや学習のための空間や条件を整える、新たな意味を構築するために協力する、新たな意味の構築や理解を他者に促す、新たな情報を適切に伝える、などのプロセスにおける言語の役割に焦点を当てている。その文脈は、社会的なもの、教育的なもの、言語的なもの、専門的なものなどがある。

ス語での内容要約をするための準備学習として位置づけた。その後、子どもたちは父親へ内容をフランス語に要約し、理解してもらった。このようにして、父親にも誰の内容が一番面白いかを評価してもらった。

家庭での結果は各自教室に持ち帰り、二つの他者評価の累計で、子ども L がチャンピオンに輝き、トロフィーを獲得した。

#### 4. 5 ディスカッション：録画作品の進行決定

次に、教師から子どもたちに Zoom 録画作品「テレビニュース特番」の制作を提案し、概要を次のように説明した。現在学習中の内容を三部構成からなるテレビニュース番組を作成し、映像にまとめる、内容はジャーナリストがアイヌ専門家とのトーク/インタビューショーを行う、というものである。子どもたちからは、「面白そうだからやってみよう」と賛同を得た。各構成の具体的内容や、作品のタイトルも、『T 組特番アイヌのミステリーに迫る！』と子どもたちの話し合いによって決められた。作品の流れは次の通りである。

【第一部】 イントロ：番組紹介「アイヌの住まい」

【第二部】 インタビュー：ジャーナリストがアイヌ民族館館長へ直撃インタビューをする。館長は「アイヌの歴史」を説明する。

【第三部】 ゲストセッション：ジャーナリストが司会をするテレビトークショーで、アイヌの方をスタジオに招き「アイヌ料理」についてのトーク。ジャーナリスト自身による「子どもの遊び」のレポート。

作品のシナリオは、子どもたちがリサーチをし、書き上げた内容がそのまま録画作品内で使用される。また、この「テレビニュース特番」という文脈を利用し、敬語学習も組み込んだ。司会者であるジャーナリスト (J) と、インタビューを受けるアイヌ民族館館長 (K)、そして、スタジオに招いたゲストとの対談、というリアルな設定から、たとえ子どもでも敬語を使用しなければならないという場面に落とし込み、敬語表現やフィラー、特定の文脈で話される語彙の学習を行った。具体的なやりとりを紹介する。



【第一部】「アイヌの住まい」

J: みなさんは、アイヌ文化をご存知でしょうか。T 組特番では、「アイヌ文化のミステリーに迫る」をお届けいたします。

【第二部】「アイヌの歴史」

J: 本日は、ユクルペシベアイヌ民族博物館<sup>10</sup>に来ております。館長さんの HL さんに、お話を伺ってみようと思います。

K: 館長の HL です。よろしくお願いたします。(略) 以上、アイヌの歴史でした。

J: 貴重なお話をお聞かせいただき、ありがとうございました。

#### 4. 6 録画カメラリハーサルと外部の専門家による評価活動

<sup>10</sup> 子どもたちが考えた架空の名前。

リハーサル録画は教師が行なった。その後、推敲と内省を目的として、次の他者評価活動を行なった。

子どもたちの内省を深め、よりよい改善を行うことができるよう、外部からキーパーソンを招き、リハーサル録画作品の評価をしてもらった。この評価活動では、元山形地方放送局ディレクター（M氏）をZoom授業にゲストとして招いた。M氏には前もってリハーサル録画を見てもらい、子どもたち一人一人に2分ほど映像専門家の視点からのアドバイスをしてもらった。このキーパーソンは筆者の教える補習校の子どもたちの母親で、日本在住時には、前述の仕事をしていたので、ゲスト出演をお願いした。このセッションでは、子どもたちは大変緊張した面持ちでM氏からのコメントやアドバイスに聞き入っていた。緊張のあまり口数が少なくなっていたものの、M氏の退出後には、各自が「内容を暗記する、視線に気をつける（C）」「もう一度内容を読み直して改善、話し方をゆっくり、わかりやすく（L）」「読み方を工夫する（R）」「音読をもつとする（N）」などの具体的な改善案が聞かれた。

また、筆者はM氏に、子どもたちの話し方について、きちんとした丁寧な対応ができていたかどうか口頭でたずねたところ「知らない人に対してきちんと話していたと思いますよ。」という感想であった。

#### 4. 7 本番録画・アンケート作成・録画作品上映発表会・アンケート実施・作品の振り返り

改善を重ねた後、11分の『T組特番アイヌのミステリーに迫る！』を収録し、Zoom発表会で約20家庭の観覧者を前に、録画上映を実現させた。上映後には、子どもたちの希望により、子どもたち自身で作成したアンケート回答への協力依頼が呼びかけられた。後日教室で、得られた回答を共有した際は、互いになずきあいながら、自分たちの作品の成果に納得していた。下記に、観覧者への視聴アンケートの設問4つと、アンケートの回答（抜粋）を紹介する。

【設問1】面白かったですか。特に、どこが面白かったですか。

- ジャーナリストの進行でインタビューという発想が斬新。
- 子どもが専門家を呼ぶという設定で、同じ子どもに敬語を使ってインタビューしているのが面白かった。

【設問2】いい点、よくない点がありましたか。あったら教えてください。

- 過去のテーマだけでなく、次のオリンピックのこともあり、参考になった。
  - 見ている人を意識して話した方がよかった場面もあった。

【設問3】分かりやすかったですか。

- テレビ番組形式で構成がよくできていて、分かりやすい。（多数回答）
  - 内容が少し難しかったので、色々な絵を使って説明したり、歴史的な事項（年号や協会名）は、パワポなどに書き込んで見せてもらったりしてもよかった。

【設問4】全体的に対話している感じがありましたか。

- カメラを通してお互いに対話しており、自分にも話しかけられている感じ。
- ただ読むだけでなく、自分の役になりきり生き生きとした雰囲気がよかった。

#### 5. 評価活動の考察

以上、プロジェクト学習の進捗状況を把握し、学習者に内省の機会を与え、一連の学習事項改

善を目的とするための形成的評価の実践2件を報告した。これらの評価は、教師視点での一方的な評価ではなく、学習者主体の評価であるとともに、家庭の保護者や専門家による、教室外からの評価であった。この二つの評価活動はプロジェクトの流れの一部であり、評価内容をその後の学習に反映させていったことを報告した。以下、考察を述べる。

### 5. 1 評価活動の考察1

アイヌの生活についてのリサーチ内容に関して、教室でのお互いの他者評価により、子どもたちは内省を深く行い、他の子どものコメントをもとに推敲を行っていた。そして、家庭での保護者による他者評価においても、教室外の第三者の視点からの公平な評価であることから、子どもたちが母親と父親の点数に関して一喜一憂もし、結果を素直に受け入れた姿勢を観察した。この教室と家庭での二つの評価結果において、最高点数を取った子どもをチャンピオンとし、トロフィーが与えられることになっていた。このトロフィーが、子どもにとっては魅力的な報酬であり、子どもたちのモチベーションを非常に高めていたことにも言及したい。

学習の到達度を考えての教師視点での評価と、子ども視点の評価とでは若干異なる点もあった。子ども同士のコメントに教師が気付かされることもあり、逆に教師視点から気づいてほしい点があっても、子どもたちからは指摘されず問題視されない改善項目もあった。しかし、話し合っていく中で、子ども同士さまざまな角度で振り返りをしており、学習者間での互恵的な学びが構築され、学習プロセスを自ら学び、自律的な学習がなされたと言える。また、家庭で母親と父親に行なった評価活動では、子どもたちは互いの内容を深く理解したようだ。親からも、自分以外の子どもたちが、どのような内容をリサーチしたかを知ることができてよかった、幅広いテーマでの親子の対話につながった、との報告を受けた。

### 5. 2 評価活動の考察2

教室外から映像の専門家を招いての話し方のアドバイスは、大変インパクトがあったようだ。専門家の話すコメントには全ての子どもがよく聞き入り、専門家が退出した後の授業では、褒められた点については素直に喜んでおり、指摘された点については各々真摯な面持ちで改善する決心を表明し、子どもたちは課題を宿題として持ち帰り、再度練習を重ね本番録画に向かっていった。アンケート設問4の回答からも分かるとおり、映像では子ども同士対話をしている様子が観覧者に十分伝わっており、これは専門家を招いての評価活動の成果であると言えるだろう。

### 5. 3 評価活動の考察3

実践で行った評価方法は、テストによって知識獲得を客観的に評価するものではなく、学習者のパフォーマンスを他者が直接評定するものである。春日井(2013)は、パフォーマンス課題における学習の到達度を評価する際に使用する評価指標として、ルーブリック評価を推奨している。この評価方法は段階的な評価基準で、分析的で客観的に学習者の知識を評定できる。学習項目の到達度を精緻的に判断できる方法ではあるが、使用するためには、ある一定の時間が必要である。また、各学習項目を評価するためには、ある一定の量の設問に回答しなければならず、プロジェクトの持つダイナミックな一連の活動の流れにブレーキをかけてしまう可能性もある。在外の継承日本語学習者の日本語レベルや教室形態には適当かどうか、さらに、時間配分についても検討

をしなければならず、週一回 90 分の授業で、それだけでなく、一回の学習時間に多岐にわたる学習項目をこなさなければならない筆者のクラスでは、不相当と判断した。そのため本実践では評価基準記述を簡略した採点表を使用した。

## 6. まとめと今後の課題

本報告では、習得した知識を活用し、総合的に応用できることを要求するプロジェクト活動の流れの要所に形成的評価としてパフォーマンス評価を導入し、学習目標達成のために、教育評価と学習指導を連動させながら進めた実践が可能であることを示唆した。本実践では、教育理論の獲得型授業、教授法である文脈化やトランス・ランゲージングを折り込み、理解の深化を図った。アクティブ・ラーニングのスタイルに、教育指針・学習目標/内容/方法・評価を連動させ、ダイナミックに学習全体を形成することで、指導と評価が一体化することにより、評価が単に知識や既習事項を測定するだけの活動ではなくなる。また、学習者が年少者である場合、評価活動も楽しんで（退屈でない）参加できるような仕組みを組み込むことが、学習継続の動機維持のためにも必要であろう。

継承日本語学習者を対象とした評価方法は引き続き多くの現場で検討しなければならない。

## 参考文献

- 奥村美菜子他（2016）『日本語教師のための CEFR』くろしお出版
- 春日井優（2013）「パフォーマンス評価による「指導と評価の一体化」の取り組み」第 6 回全国高等学校情報教育研究会（京都大会）<<https://www.zenkojoken.jp/wp-content/uploads/2013/08/06-5-3.pdf>>（2022 年 12 月 31 日）
- 加納なおみ（2016）「トランス・ランゲージングと概念構築— その関係と役割を考える—」『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』Volume 12, 77-94.
- 川口義一（2016）『もう教科書は怖くない！日本語教師のための初級文法・文型完全「文脈化」・「個人化」アイデアブック』ココ出版
- 公益財団法人アイヌ民俗文化財団<<https://www.ff-ainu.or.jp/>>（2022 年 12 月 30 日）
- 公益財団法人アイヌ民族文化財団「カムイからのおくりもの」<<https://www.ff-ainu.or.jp/web/learn/culture/history/index.html>>（2022 年 12 月 30 日）
- 「イランカラプテ」キャンペーン推進協議会 PR ムービー<<http://www.irankarapte.com/content/video.html>>（2022 年 12 月 30 日）
- 近藤ブラウン（2019）「海外における継承日本語学習者のための評価」近藤ブラウン妃美・坂本光代・西川朋美（編）『親と子をつなぐ継承語教育』第 3 部 13 章，くろしお出版，pp.190-203
- ダグラス昌子（2006）「(実践レポート) 年少者のための継承日本語教育におけるプロジェクトアプローチを使った合同授業のデザイン」『Japanese as a Heritage Language SIG e-journal 』Vol.1, American Association of Teachers of Japanese, [https://www.aatj.org/sites/default/files/uploads/JHLJournalVol01\\_0.pdf](https://www.aatj.org/sites/default/files/uploads/JHLJournalVol01_0.pdf).
- 百田美希・武井正樹・矢澤拓真・篠崎正典（2020）「中学校社会科における「パフォーマンス課題」を導入した授業の試み—単元「運転免許証自主返納から考える現代社会」の開発と実践—」信州大学教育学部附属次世代型学び研究開発センター紀要『教育実践研究』No.19, pp.111-120.

渡部 淳 (2020) 『アクティブ・ラーニングとは何か』 岩波新書

Akiyama Yuka (2013) Promotion Negotiation through Assessment Tools: Self and Peer- Evaluation in “Relay Method Project” In Kimi Kondo Brown, James Dean Brown, & Waka Tominaga (eds.), Practical Assessment Tools for College Japanese 大学の日本語クラスで使える実践評価ツール. National Foreign Language Resource Center University of Hawai'i at Manoa. pp.87-94.

García, O. (2009) Bilingual education in the 21<sup>st</sup> century: A global perspective Malden, MA: Wiley-Blackwell.